



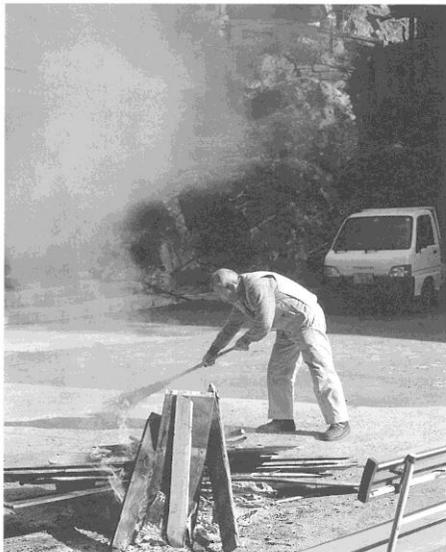
裸火



燃え尽きた薪



火を起こす
(松山東雲短期大学附属幼稚園にて)



焚き火(新宮村奥の院にて)

実家の風呂は、数年前、灯油ボイラーに変わり、町内で唯一だった煙突も姿を消した。
今では、町中で焚き火や煙を見ることは少ない。それどころか、町中で焚き火をすることが容認されない時代らしい。焚き火をすると近所から火災やダイオキシンを心配して苦情が出るし、町によっては事前に「焚き火届」を出さないといけない。「垣根の、垣根の、曲がり角、焚き火だ、焚き火だ、



焚き火の中には
サツマイモが埋まっている。

木と人間 9

た 焚き火への憧れ

松山東雲短期大学

松井 宏光

Hiromitsu Matsui



子どものころ、毎夕の風呂焚きは私の仕事だった。作業は納屋から運んだ薪を鋭で割り、炊き付け用の細い薪を作ることから始まる。次に火口から前日の灰を掻き出し、紙くずを捨てる。入れ、その上に松葉や細い木を並べて火をつける。細い木に火がつくと太い木を入れて、しばらく様子を見る。細い木から太い木にだんだんと火が移っていくのを見るのは楽しかった。何にも考えず、火口にしゃがんで炎に顔を火照らせながら、いつまでも眺めていた。

大学生となって実家を離れても、帰省すると喜んで風呂焚きをした。風呂焚きは、実家に帰り家族の一員に戻ったことを実感できる時でもあった。やがてこの楽しい作業は私の子ども達に引き継がれた。彼らにとって、祖母の家に行く最大の目的は風呂焚きではないかと思えるほど、飽きずに火の番をしていた。

私が子どもの時、家の周囲は田んぼだった。空き地も泥道も普通にあった。その頃は紙くみも木屑も落ち葉も、燃えるものはすべて庭先や風呂で燃やした。稲刈り後の田んぼでは藁くずを燃やす煙があちこちから立ち昇っていた。今では住宅やマンションが並び、

落ち葉焚き…で始まる唱歌の風景は復活しないのだろうか。

しかし原始の時代から人間は火とともに生きてきた。火を燃やし、闇の恐怖や冬の寒さから身を守り、穀物を煮て獣肉を焼いて食を得た。一方、火はすべてを破壊する恐怖の赤色でもある。

人は何万年の間、火を見つめ、火からの恩恵を得た。我々の心の奥底に裸火に対する本能的とさえ思える憧れや畏れが潜んでいるのではないだろうか。

今、焚き火を経験していない若い人たちが、人里はなれた山奥や川原で「焚き火」を始めている。ホームページでは「焚き火学会」「焚き火フォーラム」「焚き火ファンクラブ」などがヒットした。「焚き火」が静かなブームであるらしい。

まっい・ひろみつ 松山東雲短期大学教授。専門は植物社会学、環境教育。現在は県内の絶滅危惧生物調査が急務。「四国の樹木観察図鑑」を今春に出版予定。野山に行くくと何とも拾う癖がある。木の葉や枝、松ボックリ、ドングリ、ジュスタマの実、アケビの実、誰かの糞(獣に隠る)。どれもいずれは授業で使うから一挙両得か。